められたのだろう。だけどそんな事はどうでもいい。今、ここを乗りきりさえすれば自分はもうナオヤに会わずに済む。自分を狙う連中の襲撃にナオヤを巻きこむ事も、変わってしまったナオヤを見る事もなくなる。
「こういうのが嫌なら出ていけよ。オレは楽しんでるんだから邪魔しないでくれ」
覚悟を決めて、夕夜はもう一度ロキの胸に顔を埋めた。縋りつくように翼の付け根に触れながらゆっくりと視線を上げて男達を見遣る。
「もう一回、してくれる？」
「お兄ちゃんの前で？　僕は構わないよ」
笑みを浮かべてロキに唇を寄せ、彼は目を閉じた。今は本来の悪魔の姿をしているからいつも気になる髭の感触は無い。貪られながら薄目を開けてナオヤを窺った。
（あ、怒ってる）
「よそ見しないの。キミを抱いてるのは僕なんだからね。それともお兄ちゃんがいいなら、ちゃんとおねだりしておいで」
「……ん、」
唇を離しなんとか頷いてナオヤを振り向く。今はナオヤは無表情を取り繕っているけれど、ついさっきは夕夜を殺しそうな程の怒りを湛えた瞳で見ていた。それはそうだろう。封鎖からナオヤの言うとおりにせず逃げだした夕夜達にナオヤは協力してくれた。けれどそこには夕夜を後から利用しようという意図があったはずだ。それがこんな二度と使えそうにない醜態を晒している。見限ってもらうには充分だ。
（オレは、ナオヤにだって利用されたくない）
だから心にもない誘いをかける。アツロウにした時と同じように、犬のように這って媚びを含んだ目で見上げた。また殴られてしまえばそれでいいと思った。
「ナオヤも交ざる？　オレは一緒でもいいよ」
「そんな事が楽しいのか？」
「うん。オレ、抱かれるの好きみたい」
馬鹿みたいにへらへらと笑った。ナオヤの表情がおそらく嫌悪で歪む。
「お説教とかやめてね。どうせ外は悪魔だらけだし、オレももう人間じゃないんだろ？　だったら今の体で出来る楽しい事をしようかなって。この体、多少無理したって平気だし。……ね、ナオヤも試してみない？　オレはナオヤと寝てみたいなあ」
後ろでロキがクスクス笑う。
小さい頃からナオヤを見てきた夕夜には、こんな振る舞いをすればナオヤに嫌われるという確信があった。ナ